

声優の増岡弘・壤晴彦両氏を招いてお話会も行い、雑誌愛読月間(7月21日～8月20日)の期間中、同店とのジョイントフェアは再販弾力運用の側面からも業界内外から注目を集めた。メッセージは『恋と雑誌は、必ずやってくる。』たとえあなたが、大好きな雑誌の発売日を忘れていたとしても。定期購読なら、あなたの『好き』が、必ずやってきます。』であった。定期購読ポスターでは「恋も雑誌も、1年はつきあわないとね。」と、イメージキャラクターの安田美沙子さんがキュートによびかけている。予約購読申し込み総数は9700を超え過去最高を記録した。

関東交通広告協議会による中吊り掲出協賛協力は、初めて10万枚を超え、強力な支援が「雑誌の夏」を盛り上げた。

B | 東京国際ブックフェア

❖「活字離れ」への危機感から始まる

1976年(昭和51)、出版業界は1兆円産業となったが、その一方で売上げの伸び率鈍化と返品率の増大が大きな問題となっていた。世間では「活字離れ」ということばがはやりだした。出版業界はその後も成長鈍化が続き、「活字離れ」への危機感を年々深めていった¹⁶。

83年1月、書協・雑協が“出版業界全体で読書推進運動を”とよびかけ、取協、日書連、それに読進協を加えた5団体による「出版業界5団体・読書のすすめ実行委員会」を誕生させ、84年度の大規模展示会や講演会の開催などを確認した。

「日本の本展」は、こうした業界の“活字離れ”対策の大きな期待を担って、84年5月18日から4日間、東京・池袋のサンシャインシティ文化会館で開かれた。日本における大規模なブックフェアの始まりであった。多彩な読書推進・図書普及の企画、さらに読者謝恩企画などが大好評となり、4日間で4万5500名もの入場者があった。

第2回は、86年11月1日から4日間、東京・浜松町の東京都立産業貿易センターで開催された。88年の第3回からは「東京ブックフェア」と名称を変更して開催、会場も再び東京・池袋のサンシャインシティ文化会館に戻した。

❖本格的な国際ブックフェアの開催へ

1992年(平成4)の第5回は「東京国際ブックフェア」(TIBF)として、“アジアおよび欧米諸国との文化交流の推進”を目指し、本格的な国際ブックフェアへの第1歩を踏み出した。初の国際ブックフェア「92TIBF」は、出版業界あげての実行委員会を組織し、

秋篠宮同妃両殿下をお迎えして行われた2007年の「第14回東京国際ブックフェア」開会式。



1年余、意欲的に検討・準備を進めた。その結果、国内・海外の出版社約700社が参加し、12万冊の本が華やかに展示・即売された。国際ブースには日本を含む24か国・地域から106出版社・団体が出展し、とくに中国が多数出展して目をひいた。入場者数は、5日間で18万8097名となった。

94年の第6回「TIBF '94」は、会場を千葉県・幕張メッセに移し、新たに「国際的な出版社相互の交流・商談の場」という目的を加えて開催した。出展者は、日本を含め世界30か国から843社(国内369社、海外474社)にのぼった。とくにアジア・太平洋地域からは19か国・130社が出展し、当フェアのテーマである“アジアと日本、アジアと世界の出版界を結ぶ架け橋”としての国際ブックフェアへの歩みを確かなものとした。この年より後援に37か国の大使館が加わった。なお、当開催より「リード エグジビション ジャパン(株)」が運営担当となり、以後、それまでの隔年開催から、毎年開催に変わった。

97年の第9回からは、会場を有明・東京ビッグサイトに移しての開催となった。展示方法も新たにジャンル別の7つの専門フェアを併催した。ジャンル別専門フェアは、同種の出版物などを一堂に展示し、好評を得た。専門フェアは、①自然科学書、②人文・社会科学書、③学習書・辞典、④児童書、⑤電子出版・マルチメディア、⑥編集製作プロダクション、⑦印刷・製本、の7つである。以後、このジャンル別専門フェアの併催は継続されて、現在に至っている。

99年の第11回からは、会期を4月23日「世界本(と著作権)の日」をはさんだ期間の

16——1960年代から70年代半ばまで、毎年10%以上の伸びを続けてきた出版物の総売上げは、76年に伸び率が10%を割り、84年には書籍総売上げが前年比▲0.8%と戦後初めてのマイナス成長となった(ただし、雑誌を含めた総売上げでは2.6%増)。

開催に固定した。また、98年＝フランス年、2000年＝オランダ年、01年＝イタリア年、05年＝ドイツ年など、その国の出版物を中心とした文化を紹介するコーナーを会場中央に設置して交流を深め、その年度の大きな特徴とした。

02年(平成14)第14回では、児童出協・読進協などを中心に「子ども読書の日」制定記念ブースを設け、読書推進運動を積極的に進めている団体の活動パネル展示を行うほか、読み聞かせ、紙芝居などのイベントを展開した。また、会期中に「子どもの読書活動推進法」促進セミナーを開催し、草の根からの読書推進活動の重要性を強調した。

❖TIBF開催権の譲渡

2003年(平成15)の第15回TIBF実行委員会は、TIBFの運営の効率化とさらなる発展をはかるため、TIBFの開催権を「リード エグジビション ジャパン」に7月15日付で譲渡し、書協など7団体¹⁷で構成する実行委員会と共催することとなった。TIBFは、05年第17回より「国際文具・紙製品展」との同時開催となり、期間も7月に変更した。

「TIBF2006」では、1988年の「88東京ブックフェア」から2005年まで名誉総裁をしていただいた三笠宮殿下がご高齢を理由に辞退されたため、秋篠宮殿下に名誉総裁をお願いした。殿下は、開会式のテープカットにも臨席された。

❖雑協、東京国際ブックフェアに初めて参加

2005年(平成17)、雑協は「東京国際ブックフェア2005」(TIBF、7月7日～10日)に初めて参加・出展した。この年からTIBFの開催が従来の4月から7月に変わったので、「雑誌愛読月間」のPRを目的に出展し、ユニークなイベントが好評を得た。日本図書普及の協力を得て実施した「あなたが雑誌の表紙モデルに—オリジナル図書カードをつくろう」コーナーでは、その場で来場者の写真を撮影し、24タイプの雑誌の表紙テンプレートを選択し、オリジナル図書カードをつくった。500円額面のカードを額面金額で販売したこともあって、連日、行列ができる人気ぶりで、このコーナーでは、10月からの「図書カード」への統一化もPRした。「体験 手づくり(手漉き)ではがきをつくろう」は土、日の2日間で親子連れ中心に延べ600人が参加する人気イベントになった。日本製紙連合会・紙の博物館の協力で、あっという間に、手づくりのはがきができるラインを特設し、同連合会の「手づくりはがきコンクール」とも連動した。この企画は、秋の神保町ブックフェスティバルにも登場して話題となった。

17——東京国際ブックフェア実行委員会の構成団体は、2003年(平成15)までは日本書籍出版協会、日本雑誌協会、日本出版取次協会、日本書店商業組合連合会、読書推進運動協議会、出版文化国際交流会、日本洋書協会であったが、2004年に国際交流基金が加わり、8団体となった。